

東日本大震災

宮城県現地調査報告書

- I 現地調査の概要
- II 報告レポート
 仙台市・石巻市・女川町
- III 資料
 基礎データ・写真

2011年4月2日、自由法曹団東日本大震災対策本部のスタッフは、宮城県を訪問して被災状況を見分するとともに、関係者との協議・懇談を行った。

この冊子は、現地調査の内容等を取りまとめたものである。

2011年 4月 8日

自由法曹団東日本大震災対策本部・現地調査団

伊賀興一（大阪）・西田雅年（兵庫）・沢井功雄（神奈川）
田中 隆・小部正治・久保木亮介（以上、東京）

I 現地調査の概要

【日 時】 2011年 4月2日

【場 所】 宮城県仙台市・石巻市・女川町

【参加者】（自由法曹団団員の敬称略）

対策本部

伊賀興一、久保木亮介、小部正治、沢井功雄、田中隆、西田雅年

宮城県支部

庄司捷彦（石巻市）

小野寺義象、草場裕之、山田忠行、斎藤信一、菊地修、堀井実千生、
鶴見聡志、木山悠、吉田大輔、毛涯梨恵、花生耕子（以上、仙台市）

被災地三支部と対策本部の協議会

安藤裕規、大峰 仁（福島）、佐々木良博（岩手）

自由法曹団外の協力・参加

福島かずえ仙台市議、嗟峨サダ子仙台市議、

庄司滋明石巻市議、三浦一敏石巻市議、高野博女川町議

(地方議会議員はいずれも日本共産党)

前田拓馬弁護士 (石巻市)

司法修習生2名、「赤旗」記者ら

タクシー 自交総連宮城地連

【仙台への行程……東京より】

往路 4月1日 23:10 東京駅発 深夜バスCJ503便

2日 6:30 仙台到着

(実際には5:30に着き、唯一開いていた「まんが喫茶」で朝食)

復路 4月2日 23:30 仙台駅発 深夜バスTSR200R便

3日 6:30 東京到着 (実際にはやはり5:30着)

【調査活動】

A 仙台班

田中、伊賀、沢井、小野寺、吉田、毛涯、花生、修習生2名

a m 7:00 仙台弁護士会館前集合

福島市議の自家用車、タクシー3台に分乗。若林区に向かう。

沿道のガソリンスタンドには、給油を求める自動車の長蛇の列。

a m 7:30 若林区の被災地 仙台東部道路—仙台市漁協・深沼海水浴場—荒浜地区・井上地区・藤塚地区(名取川河口)—東六郷小学校(生徒・住民が緊急避難して救出された学校)

津波によってすべてが押し流され、瓦礫の荒野と化している。

安否未確認の住民は多数に上り、瓦礫の下には遺体が眠っているに違いない。鬼哭愁々。

a m 9:00 六郷中学校(避難所) 大友氏(副責任者)の話

a m 9:50 ハートフル仙台(津波被災地区内 2階以上で老人ホームなど) 石橋氏の話

a m 10:20 仙台つどいの家(障がい者支援施設) 下小部理事長の話

a m 11:00 仮設住宅建設予定地区(車中から)

a m 11:30 太白区緑ヶ丘4丁目地区

嵯峨市議と合流。造成地の地盤が崩落して随所に地割れ。住民には避難勧告。「危険建物」ではなく「危険宅地」の表示。

a m 12:00 現地調査終了 福島市議・嵯峨市議とお別れ

(休憩・昼食 仙台市内では飲食店も営業していた)

p m 2:00 東北3支部との協議 (一番町法律事務所)

安藤、大峰(福島)、佐々木(岩手)参加。

交流

被災3県の状況、支部・団員の活動
対策本部の活動。遠隔被災者への支援活動。

阪神・淡路大震災の経験・教訓

意見交換

原発被害の実情と求められる対策

これからの対策活動の方向

日程の調整

p m 5 : 0 0 協議終了

宮城県意見交換会（横田県議事務所）に向かい、石巻班と合流。

B 石巻・女川班

小部、西田、久保木、草場、山田、斉藤、菊地、堀井、鶴見、木山
庄司（石巻で）

a m 7 : 0 0 仙台弁護士会館前集合

タクシー4台に分乗して石巻に向かう。

a m 8 : 4 0 三陸道PAにて休憩。自衛隊のジープや大型車の列に全国から来た親族や関係者の自家用車で高速道路は大渋滞。

a m 9 : 3 0 石巻市の庄司団員の事務所に到着（高台にあり被災を免れていた）。2階の部屋に上がり10分ほど日程や状況報告を受ける

a m 9 : 5 0 4台のタクシーで日和山の頂上（桜の公園）に全員で行く。日本製紙の工場、水産加工工場（一部）をのぞき、海岸線から日和山までの間や旧北上川の沿岸には、まともに残っている建物は鉄筋のごく僅かを除いて存在しない。

a m 1 0 : 2 0 石巻市の旧北上川の沿岸部を通行する。周辺は木造住宅や工場・店舗など全ての建物が流されていて、車や船があちこちに散乱している。食料の配給のために並んでいる列が数カ所見えた。万石浦に来るとほとんど罹災していない地域が続く。

女川町にはいると海拔30メートル地区まで津波が押し寄せ、街は幾つかの鉄筋の建物を除き全て全壊し、街がなくなっている。

a m 1 1 : 0 0 女川町総合体育館。原発協力の交付金で建築された陸上競技場の脇にある。高野博・女川町議との面談（庄司捷彦団員の紹介）。

p m 1 : 0 0 女川町震災対策本部で女川町総務課長から被災状況等を伺う。懇談中に余震。（前田拓馬弁護士の紹介、同弁護士は高速道路が渋滞のため参加できず）。

- p m 1 : 5 0 女川町から石巻市に戻る途中、行きと異なり旧北上川の支流（上流）の沿岸を通る。あちこちで川が氾濫して大きな被害を与えていたことを知る。
- p m 2 : 1 0 石巻市湊小学校の避難所。庄司滋明石巻市議（庄司団員の弟、避難所責任者）から、避難所の運営や問題点などを聞く。
米軍のシャベルカー・大型トラックが校庭のがれきを排出。
- p m 3 : 0 0 日本共産党・東部地区委員会。三浦一敏・石巻市議（東部地区委員長）との面談。直前に5つの自治体を訪問して援助と情報収集をしていたのでまとまった話が聞けた。
- p m 4 : 0 0 仙台に向かう。宮城支部団員の一部は調査を継続。
救援の車両などで渋滞。
- p m 6 : 4 0 仙台班と合流

C 両班合同後

- p m 5 : 0 0 宮城県各界意見交換会（横田県議事務所）
共産党県議団が主催する意見交換会。県下の被災状況、対策の状況、各団体の活動の交流など。おおむね週1回開催されているとのこと。
自由法曹団から、小野寺・伊賀が発言
- p m 7 : 3 0 調査団・宮城県支部意思統一（横田県議事務所）
0424の対策本部（仙台）、0506学習討論会（郡山）の開催など

D 福島県三春市

調査終了後、伊賀が立ち寄り。三春市長・副市長と懇談。
津波被害は深刻だが、生活基盤と事業基盤の再建をどう用意するかが課題。
より深刻なのは原発事故の避難指示によって住民が「もどるところのない流浪の民」にされようとし、汚染濃度と風評被害に翻弄されて自殺者まで出ていること。原発被害者の救済を正面からとらえないといけない。

（田中 隆・小部正治）

II 報告レポート

1 仙台現地調査報告

東京から仙台に向かう深夜バス乗車の途中から（福島県あたりからか）、道路に段差が多く起こされることが多かったです。途中で止まったサービスエリアのガソリンスタンド（仙台のガソリンスタンドも）は、気が遠くなるような長い行列でした。4月中には、新幹線が開通するようですが、車で現地入りされる方は、今後注意が必要です。

予定より1時間早い午前5時30分に仙台駅に到着しました。早朝の商店街は、ほとんどのお店が閉まっていた。道行く人に聞いたら、なぜかすき屋だけは開店していますとのことでした。すき屋は見あたらないので、近くのまんが喫茶に行きました。申し訳ありませんが、まんが喫茶と伊賀先生、田中先生のミスマッチ、一方で、まんが喫茶と小部先生、西田先生の見事なマッチぶりが対照的でした。

当職は、久保木先生の報告にもある石巻・女川班とは別行動で、伊賀先生、田中先生、宮城の小野寺先生らと、仙台若林区、太白区を視察しました。現地からの情報でタバコ（特に国産）がないと聞いていたので、現地調査の運転をして下さった自交総連に東京からもってきたタバコをカンパ（東京でも国産タバコは、買える個数が制限されています）しました。宮城支部にもカンパしましたが、菊地先生しか吸わないようなので、今後は、カンパの内容を再考します。

仙台市若林区の深沼海水浴場にまず向かいました。遺体が海岸に数百体並んだ場所です。都市部（後述する太白区緑が丘の住宅街の様な場所を除く）は、建物損壊、土地亀裂は見られるものの、風景に余り変わりはありません。東北自動車道の高架を越えると、風景が一変します。現地の避難所で生の声で印象的だったのは、あの高架のせいで、津波が押し戻され、逆流のエネルギーで、私らの被害が増したのだという声です。気が重くなりました。津波被害の恐ろしさは、すでに皆さんが報道で見られているとおりです。気になったのは匂いです。まだまだ海が見えないのに、潮の香りがしてきます。田んぼを含めた土地が海水につかっているからです。泥だらけの土地、建物、自動車らの瓦礫、そして瓦礫の下に未だ埋まっているかもしれない遺体。撤去だけでも途方もない作業になるのは想像するに難くありません。労働者はもちろん、事業者も、全てが生活基盤を失い、自治体の機能も不全の状態です。農業、漁業、林業、工業の復興は、気が遠くなるような年数とエネルギーを必要とするでしょう。

生徒・住民が、緊急避難して1日を過ごして救出された東六郷小学校は、校舎の中に軽トラックが乗り入れてありました。校舎内は、早朝でも息が白く寒かったです。トイレは流されておらず、異臭が漂っていました。津波の轟音、トイレの異臭、暗さ、寒さ、いつ建物が崩れるかわからない状態で過ごした避難者の1泊の恐ろしさが身にしみて伝わっ

てきました。

避難所の六郷小学校は、そもそも生活環境が整った場所ではありません。神奈川の避難所しか目にしていませんが、まさに雲泥の差です。臭気もしましたし、文字通り足の踏み場もないすし詰め状態で、高齢者、子どもが多く、病気になったら、すぐ蔓延してしまうのでは・・・と不安になりました。陸の孤島のように無事だった特別老人養護施設（2階は無事でしたが、1階は津波の影響で泥だらけです）の2階で寝た切りの要介護者のケアも心配です。

太白区の長町駅前に3150戸建設予定の仮設住宅の一日も早い完成と避難所住民含めた住居喪失、損壊者、全ての速やかな移転が望まれます。仮設住宅建設予定地区はもともと仙台中華街になる予定だったらしいのですが、何ら中国系にルーツのない長町に中華街作るよりは、余程世のため、人のためになる有用な利用方法でしょう。

その後、太白区緑が丘の住宅街に移動しました。今回の震災は、①地震、②津波、③原発事故の要素があわさることで、被害の大小を図ることもあるようですが、単純に足し算で被害の大小を図ることが出来ないことがこの住宅街を見てよくわかりました。建物は、耐震構造がなされている影響か損壊があまり見られません。問題は、塀や何よりも造成地の地盤が崩落して地盤割れが著しいことです。建物危険ならぬ宅地危険は正直生まれて始めて見た気がします。

岩手、福島被害状況は、現地の団員の意見を聞いただけですが、それぞれの地域の特性もあり被害状況は様々で、どこも被害は形を変えども、当たり前ですが、深刻のようです。宮城の先生方は、とても暖かく現地調査団を迎えてくださいましたが、やはり疲れておられるという印象を受けました。救助もそもそもまだ終わっておらず、復興への道のりは遠いですが、現地の団員らと密接に協力し合い、この問題を取り組んでいこうとの思いを強くしました。

帰りは、高速バスの中で、段差も気にならないくらい疲れで寝入ってしまった0泊3日の現地調査報告でした。

2 石巻調査の報告

日和山公園から石巻湾、旧北上川周辺の被災状況を臨む

石巻・女川調査グループは、午前中、地元の庄司団員に案内され、石巻市日和が丘の高台にある日和山公園に到着。南方面に石巻湾を見渡すと、信じがたい光景が広がる。海岸線に近い水色の建物（市立病院、機能回復不能とのこと）など一部の建物を除き、殆どの家屋・工場施設が姿を消し、瓦礫の平野と化している。手前にはマルハニチロ食品の缶詰工場の建物も見えるが、ここも機能は失われている。旧北上川の河口にある日和大橋は、震災後トラックが横転し通行不能の時期があったが、現在は車が通行しているの見える。

震災後、数回石巻を訪れている草葉団員（宮城）によれば、これでもだいぶ瓦礫が集められ減っているとのこと。津波直後の光景は、もっと凄まじいものであったろう。

瓦礫の間につくられた「道」を、人々が思い思いの方向に歩いたり、立ち止まったりしているのが見える。米軍と自衛隊らしき軍服姿の集団が、瓦礫撤去を進めながら遺体捜索を行っている。昨日は14体見つかったとのこと。宮城県全体で、通常の23年分の廃棄物が発生したという。未だ多くの亡骸が瓦礫の下に眠っているのだろう。

石巻湾を襲った津波は、日和が丘の高台を除き、周囲一面の町々の建物を軒並みなぎ倒し、車と人を飲み込み、丘の斜面に押しやり押しつぶしながら、北上した。防潮堤はあったが津波の前には全く無力だった。地震から津波まで約30分。自宅に物をとりにいって津波で亡くなった人も多数いたという。他方で、津波に流されながら何かにつかまって生き残った人もいた。津波は、日和が丘の東側を流れる旧北上川沿いに最奥10km以上北に突き進み、日和が丘は完全に「陸の孤島」と化した。日和山公園に逃れた人々の眼下、南側にある門脇町では重油とガスへの引火により大規模な火災が発生し、被害を拡大した。

庄司団員によれば、石巻湾周辺に住んでいた人で、またここに家を建てるかと尋ねると皆「嫌だ」というそうだ。津波の恐怖・トラウマは私達の想像を超えるものがあるだろう。公共的な大きな再開発の力が入らないと、到底無理だろうとのことである。

公園内を移動して北東方面から旧北上川の上流を見る。中州の建築物は石の森漫画館を残して、ほぼ全滅。旧北上川の西側は津波の後火事にも襲われ、東岸は津波の被害で建物の倒壊は顕著だが、火災は免れたとのこと。北上川の中州から真東、川と平行に南北に走る女川街道を渡ると、避難所になっている湊小学校（午後に訪問することになる）がある。湊小学校に逃げた人は、人や車が流されるのを建物上から目撃することとなった。車に挟まれて亡くなったり、親子別れになったりするのを見たという。生き延びた人々の精神的な打撃もまた甚大だろう。

自交総連の労働者の運転するタクシーに乗り込み、日和が丘を下り、旧北上川の東岸に渡り女川街道を南下、女川町に向かう。街中の道路や駐車場に、津波で押し流されてきた中型の漁船が唐突に現れる。電柱や信号灯は歪み、信号機は付いていない箇所が殆どである。家や店舗前で壊れた家具や商品を屋外に運び出す人々、建物敷地にある泥や乾いた砂をシャベルですく人々がいるが、街の機能は失われたままである。建物が比較的残っているエリアに入ったかと思うと、また全壊状態が続くエリアに入る、とうことを繰り返しながら進んだ。

湊小学校の避難所を訪ねる

女川町の調査を終え、石巻市内に戻り、避難所となっている湊小学校に庄司滋明・石巻市会議員（庄司団員の実弟、避難所責任者）を訪ね、体育館でお話を伺った。体育館は物資の運び入れ先となっており、ボランティアや自衛官・米軍が頻繁に出入りし、あるいは

物資の入ったダンボールをリレー方式で運び入れたりしている。

庄司さんは湊小のすぐ近くのビルで税理士業務に従事していると地震が発生。津波が来るというので地域の人々に自転車で避難を呼びかけ続けていると、約45分後、人々が「来た！」と叫びながら逃げてきたため、自分も湊小に駆け込んだ。校舎にいる人々が「早く上がれ！」「来てるぞ！」と叫ぶので、振り返らずに校舎に駆け込んだが、津波はすぐ背後まで来ており、あと5秒遅れれば被害者になっていただろうという。押し寄せた瓦礫がブロックの役割を果たし、二波、三波から湊小を守った。湊小まで到達できず、学校前の女川街道の歩道橋で一夜を明かした人々もいた。

震災直後は瓦礫により湊小は「陸の孤島」となり、車一台が学校に出入りできるだけの道を作るのに大変な苦勞をした。訪問当時も湊小の校庭には相当の瓦礫が残されており、自衛隊の車両が撤去のために頻繁に出入りしているが、瓦礫は震災直後の4割ぐらいに減ったそうである。

湊小は当初1100人が避難し1000人台が10日ほど続き、現在は300人。避難所を出た人は、親族を頼り東京や仙台に移った人達が多く、自宅が何とか住める状態なので戻った人もいるとのこと。避難所300人は65歳以上が6～7割。避難所に必要なのは、水と食料・建物・生活用品・医療・介護。300人いると水や食料はあっという間になくなるので、求め続けなければならない。生活用品は常に遞減するし、種類が雑多なので管理・把握が非常に困難。震災後2～3日は慢性疾患対応、さらにインフルエンザの流行など、時の経過とともに対応すべきことがらに変化してゆく。要介護者については、市の設けた福祉避難所や被害のなかったサービス施設に入ってもらっている。

震災後しばらくしてメイク・ザ・ヘブンというボランティアの人々が水と食料を持ってきてくれ、ようやく避難所作りが本格化していった。コミュニティを維持するため、避難民を地域ごとに分けて教室に入ってもらい音頭を庄司さんがとった。普段から地域で活動や選挙運動をやっており、多くの人達とのつながりがあったので、周囲から請われ対策本部長となったが、せいぜい津波の水が引くまでの一週間位のことだろうと思っていた。

しかし、学校は未だ電気・ガス・水道が今も届かない状態。卒業式はボランティアと住民の協力で行ったが、新年度になり避難所と学校機能の両立が問題となっている。避難民を教室から体育館に移す話も出たが、体育館は風が通り抜ける状態で非常に寒く（出入り口ドアが破損している）、避難民の生活の質をこれ以上低下させられない。教育委員会に問い合わせたところ、他の学校で授業をやる方向で検討中とのことだ。

庄司さんのお話はさらに続く。

体育館では、物資の窃盗も起こるといふ。ボランティアは交代制で5人必ず維持するなど、避難所で大きな役割を果たしている。学校内だけではなく、地域の泥出しにも出ている。仕事に限りは無い。

ここから仕事に通う避難民もいる。避難民からは、家屋・車の処分、本人証明の困難な中での預貯金の扱いなど、様々な質問も出ており、仙台弁護士会のQ&Aを張り出し、2万部ほど印刷して避難民や住民の方々に渡す予定とのことである。

残された300人の今後の生活については、仮設住宅の建設に国がどう責任を持つかが問われる。(調査団の西田団員(兵庫)から指摘があったように、阪神淡路の時には仮設住宅での高齢者の孤立や孤独死など様々な問題が起こった。)崩壊した建物跡地をどう利用するか。恐怖でもう住みたくないという人もいるが、それを乗り越える地域コミュニティというのもありうるのではないか。

産業がなければ地域の復興はない。津波災害は産業に与える影響という点で地震災害と異なる。水産加工業等ものづくりのダメージが大きい。国が船・工場・加工場を作る。これまでの経営者・法人が指定管理者として運営をし、一定の力がついたらこれらの工場等を買収する、という展望でもなければ、若干の補助だけで商売をやれといわれても無理だろう。石巻市の産業部にはこういうことを伝えてあり、市としてもそのように要求してゆかないと駄目だと申し入れている。地震で地盤が40cmも下がってしまい、冠水が多くなったのも非常に問題だ。一地方自治体に対応せよというのは無理だ。

生活が落ち着くにつれ、皆さん(法律家)の出番が増えてくると思う。

三浦一敏・石巻市会議員を訪問

続いて、日本共産党・石巻市東部地区委員会にて三浦一敏・石巻市会議員(東部地区委員長)と面談した。同地区委員会は、5つの自治体を訪問して援助と情報収集をしていたのでまとまった話が聞けた。以下、三浦氏から伺った話の概要である。

石巻市は、地震そのものの被害もあるがやはり津波の被害が中心だ。津波は北上川を遡ったが、上流で西にうねっている所があり、それより上流では被害はなかった。石巻は電気の復旧が早く75%程度だが、東松島市長や牡鹿半島方面など、ライフラインの復旧が遅れている箇所も多い。この間、日本共産党で各市町村を回って義捐金を手渡しつつ、震災の被害の状況や、救援・復興のための取り組みや課題について意見交流をしている。幾つかを紹介する。

石巻市長 : 義援金は本当に有難い。水産業と工業港を早く復活したい。

女川町長 : 瓦礫の撤去、ライフラインの復旧もまだまだの状況。ガソリンがなく困っている。女川は水産の町だ。海、漁業の再生しか生きる道は無い。

東松島市長 : 海岸線中心に市の3分の1が水没し、犠牲者は3月24日現在で714人。電気・水道は29日時点で5割ほど復旧。仮設住宅の設置の規模とスピードが大きな課題。従来の法の適用を度外視した国家的対応が必要だ。03年の連続地震の教訓は色々と生かされているが、今回の震災と津波は想定外。

南三陸町長 : 津波は45号線や気仙沼線のガード・線路を越えて入谷の奥まで及んだ。町

は無一文で何も無い、義捐金に心から感謝する。体育館の廊下まで避難民が溢れている。早く集団移転を促したい。水産・養殖を復活させるため、少しでも使える漁港と船を確保したい。

気仙沼市長：地盤沈下が深刻で、相当の盛土を造成しないと、町は再生できない。電気
の復旧が遅れている。仮設住宅は、3000戸位必要だ。

追記

本稿作成中の4月8日の深夜、宮城で震度6強の地震が発生した。テレビ画面に、懐中電灯を手に、日和山公園から夜の石巻市を不安そうに見下ろす住民の方々の映像が映し出された。大震災の災禍に苦しむ避難民を、新たな不安と恐怖が襲っている。

(久保木亮介)

3 宮城県・女川町の被災状況について

震災対策本部のメンバー6人は、4月2日の早朝に仙台入りし、宮城支部の団員と合流した。仙台班と二手に分かれた後、まず石巻市、続いて女川町の調査に向かった。石巻市の被災状況については、案内役を務めて頂いた地元の庄司団員から、すでに詳しい報告がなされている。以下では、女川町の被災状況について報告する。

津波が女川町を破壊しつくした

石巻市の被災地を東進して万石浦の北岸沿いを走行中、被災の影響をほぼ完全に免れた街並みがしばらく続いた。しかし、浦を離れてさらに東進すると、再び左右に倒壊した家々の残骸が延々と続く光景が始まる。左右の山の斜面まで住宅地が伸びているが、その半分位は津波により倒壊するか、押し流されてきた瓦礫に覆われ無残な姿をさらしている。

撮影のため車の窓を開けると異臭（磯の腐った匂いとでもいうか）が鼻を突く。

津波は、建物だけでなく、全ての物（家具、寝具、衣服、布類、紙類、プラスチック類、植物）を押し流し、飲み込み、引きちぎってしまった。これらの断片と、石やコンクリートの破片がグチャ混ぜのまま「瓦礫」を構成し、街を覆い尽くしている。内蔵をぶちまけた様なグロテスクさである。それでも車両が通行できるのだから、多少は瓦礫が除去・集積されつつあるのだろう。いったい、震災直後はどのような悲惨な光景であったのか。

高台にある女川町総合運動公園に向かい坂道を登ってゆく途中、左右に残されたビルの2階3階の窓や屋上から、瓦礫が顔を覗かせ、ぶら下がっている。港のすぐ近くの女川駅に停車していたと思われる列車が、津波で折り曲げられ、港から半キロは離れた高台の墓地まで押し流されていた。近くには、半壊し横転した漁船もある。津波は女川湾を超え、町の遥か奥深くまで突き入り、住宅3800戸のうち2000戸を破壊した。震災から3週間を過ぎた今も、その凄まじい傷跡は消えていない。

避難所と被災者の生活状況

公園に到着し、避難所である総合体育館に入る。避難民やその関係者、ボランティアら

しき人々でごった返す1階フロアの一角で、高野博町会議員（日本共産党）に話を伺った。

地震発生時、同氏は町役場3階の町議会におり、議事中断、解散となり屋外に出た。その後、津波が役場を襲い、屋上を残して3階まで浸水、職員の犠牲者も出た。町議16名中2名が死亡、2名が現在も行方不明である。1日の時点で遺体搬入数は339体、行方不明者は617人。高野さんは危うく難を逃れ、その後は被災民の救援に奔走されている。

「女川町にはチリ地震時の津波の体験者も沢山いたが、20m近い津波は誰も予想していなかった、経験が仇（あだ）になった」と高野さんは言う。まさかここまでは津波が来ないだろうと思ひ込み、犠牲になった方々も多くいるだろう。

避難所は町内全20箇所で、収容人数は1日時点で2033人で、圧倒的にお年寄りが多い。また、通学時の震災であったため親を失った子供が少なくないそうである。食事は1日2回支給されているが菓子パンが多く、たまにお粥がでると喜ばれるとのこと。孤立した地域・住民はなく、誰がどこにいるかは把握できており、これは合併されていない町の良さであろう（原発受け入れによる交付金の問題が絡むが、そのことは措く）。自衛隊が大きな浴槽を二つ作ったので入浴に不自由は無いそうだ。医師は全国から医者への応援があり何とか足りているようであるが、避難所内の感染症がひどく風邪や下痢が集団的に発生しているとのことである。

体育館の一室に入り、被災者のプライバシー確保のため作られたダンボールによる簡易パーテーションを見学した。高さが十分ではなく、毛布にくるまり横たわっている高齢者の方々（女性が多い）と目が会ってしまう。全く区切りがないよりは良いが、それでも長期化すると耐え難いだろう。

自治体機能の喪失

公園の別の建物内には、女川町災害対策本部が置かれており、役場の機能も一時的に移されている。対策本部の総務課長に、短時間だが面会し話を伺うことができた。

同氏と高野さんが共通して述べた問題点の第1は、自治体（町）の機能の喪失である。

役場は失われ、対策本部は避難所の運営や在宅者の救援等で手一杯であり、遺体の捜索すらなかなか追いつかないのが現状である。住民に関する基本データが流され失われてしまい、財務会計システムも壊れてしまった。対策本部の隣は避難者名簿閲覧室、その奥は本人確認書と住民票の発行所が設けられている。それ以外の自治体機能は、失われたままだ。被災者が様々な支給を受けるために必要な「罹災証明書」の発行も、未だ実施できずにいる。総務部長は「手作業でやるしかないですね」と呟くように述べていた。職員達は、住民の救援のため、限界を遥かに超えて働いている印象を受けた。

水産業の壊滅

第2に、水産業が壊滅してしまい、その回復は容易でないということである。

女川町は、カキ、ギンザケ、ホタテ、アワビ、ホヤなどの養殖漁業、サンマなどの沿岸

漁業が盛んで、特にギンザケとサンマの水揚げ量は全国有数である。町全体の生産高の大部分を水産業が占めており、「原発労働者以外はあらかじめ水産業で成り立っている」（高野議員）のが女川町である。

しかし、津波が魚市場、三箇所あった製氷所（新鮮な生のサンマの出荷に不可欠）、ニッスイ（日本水産株式会社）の女川工場（冷凍食品等の生産）・女川油飼工場（油飼・魚粉等の生産工場）など、この町の水産業・水産加工業を殆ど破壊してしまった。

地震による地盤沈下は約1mといわれ、満潮時には沈下した岸壁を越えて、海水が交通量の多い道路にまで侵出してくる。私たち調査団が往路に通った道も海水に浸され、帰路は水を掻き分け急いで通り抜けることになった。

岸壁の修復には億単位の資金を要することから、ニッスイが女川工場から手を引くとの話もでてきている。これは、町にとって致命的であろう。養殖漁業は開始するのに、筏・卵等に一定の資金を要し、開始してからも3年間は収益が期待できない。その3年間の生活保障に加えて、工場や市場を回復させるためには国が何とかしないと、と高野さんは繰り返し強調された。

結び

被災者の方々の救助・救援は、物資がある程度届いているとはいえ、今後の避難の長期化を睨めば、さらなる改善が求められている。女川町のように自治体機能がほぼ喪失している被災地に対し、国家的援助をどれだけ実態に沿って徹底できるかが問われている。

また、水産業をはじめとする女川町の復興は、「自助努力」だけでは到底不可能であることは明らかである。今回の調査と前後して、民主党から「東日本大震災復旧復興対策基本法案（素案）」が出された。そこでは「地域社会の再生」「人々の絆」「農林水産業の復旧復興」等が謳われているが、被災地の実情に沿い、住まいも仕事も失った被災民の生存権・労働基本権を保障するものとなるかどうかは、全く不明である。被災地の実態を踏まえ、憲法的見地から機敏に提言してゆくことも、団の重要な課題となるだろう。

（久保木亮介）

Ⅲ 資料

1 基礎データ

(1) 仙台市（HP等より）

* 仙台市 人口1,046,654人 世帯数465,408 (11年3月)

うち若林区 人口132,044人 世帯数 58,900

宮城野区 人口190,818人 世帯数 85,865

* 震度 6強=宮城野区、6弱=青葉区、若林区、泉区、5強=太白区

* 人的被害 死者=412名、負傷者=213名、行方不明=調査中

避難=約4200名(0331朝日)

宮城県 死者=6,959名、安否不明=8,936名、

避難=74,096名 (0331朝日)

* 住家被害 調査中(HP)

* 105,491戸停電(0331現在)、津波被害のあった地区以外水道復旧

* 震災・津波報道

震災直後の0311pm4:00ころ、南隣の名取市が津波に飲み込まれる状況が、自衛隊機の撮影で報じられた。「実況」を見た衝撃は忘れられない。0311のうちに、「仙台市若林区で遺体200~300」と報じられた(0312朝刊にも掲載)。「まさか・・・」と思ったが、事実だった模様。

(2) 石巻市・女川町

* 石巻市

人口162,822人 世帯数60,928戸(2月時点) 面積555.78km²

死者2,283人 行方不明者2643人(3月31日午後6時現在)

避難所数152箇所、避難者数22,745人(市HP3月31日時点)

……牡鹿町は平成17年に石巻市に合併。

* 女川町

人口10,016人 世帯数3,852戸(2月28日現在) 面積65.7km²

死者310名 行方不明者837人(3月31日午後6時現在)

避難所数20箇所、避難者数2,530人(町HP3月31日時点)

……女川町(おながわちょう)は牡鹿郡の一町。

2 地図

国土地理院の浸水範囲概況図(8)~(10)を参照

<http://www.gsi.go.jp/kikaku/kikaku60003.html>

3 写真
【仙台市若林区】



【仙台市若林区】



【仙台市太白区緑ヶ丘4丁目地区】



【石巻市】



【女川町】



東日本大震災・宮城県現地調査報告書

2011年 4月 8日

編集 自由法曹団東日本大震災対策本部

発行 自由法曹団

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-28-201

Tel 03-3814-3971 Fax 03-3814-2623

URL <http://www.jlaf.jp/>